

三河 アララギ

平成二十三年

五月号

第五十八卷 第五号



ニューヨーク日記(55)

<http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

March 1, 2011 : Peanut butter and jelly macaron

Blue Shoe Diaries



マカロンってとってもパリだよ。最近NYでちょっと流行って来ています！なかなかピエール・エルメのようなマカロンには出会えないけどNYはNYなりにアメリカンなマカロンが出て来てるよ～こちら、ピーナツバター&ジェリーのマカロン。こっちの子達は皆ピーナツバター&ジェリーのサンドイッチ食べて育っているからこれ当たるかもね？美味しかったけど私はレモン味とかの方が好きだな。パリ行かなくっちゃ！日本は良いよね！東京にピエール・エルメのお店在るもんね！

I love macarons! They are a must when you're in Paris. Home of Pierre Herm, the god of these jewels. Japan is lucky, they have a few Pierre Herm boutiques. Here, in NY, we're not so lucky but Bouchon does a good job at bringing American inspiration to this French sweet. They've made a peanut butter & jelly macaron. It was super rich but had a nice flavor balance once you reached the jelly. I think people who grew up eating peanut butter & jelly sandwiches will appreciate these. As for me, I still prefer lemon or raspberry macarons! I miss Paris!

目次

第五十八巻第五号(通巻六八九号)

表紙・のど黒	今泉 由利 (1)	可能性	山口千恵子 (26)
ニューヨーク日記(55)	Blue Shoe (2)	冬ゆかんとす	夏目 勝弘 (27)
目次	(3)	無精髭	秋山 逸穂 (28)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より	(4)	天災か人災か	伊藤 忠男 (28)
歌集・二本の木	杉浦 弘 (5)	ことよせ	いしはとぶ (29)
花房	岡本八千代 (6)	中天に	白井 信昭 (29)
残すべき物	白井 久吉 (7)	俳句	植村 公女 (30)
地球なる	今泉 由利 (8)		一石 (30)
金魚飯	伊藤八重子 (9)		喜仙 (31)
今年も	青木 玉枝 (10)		皓一 (31)
日本合戦譜	佐々木利幸 (11)	私の一首	伊藤八重子 (32)
寒き弥生は	林 伊佐子 (12)		半田うめ子 (32)
ほつほつ温き	内藤 志げ (13)		平松 裕子 (32)
恐ろしさ	伊与田広子 (14)		堀川 勝子 (33)
恐怖	金津 文枝 (15)		山口千恵子 (33)
弥生一日	近藤 映子 (16)		弓谷 久子 (33)
水ぬるむ日	胃甲 節子 (17)	贈呈誌三月号	佐藤 喜仙 (34)
心づかひの	半田うめ子 (18)	和歌から派生した季語の本意(その十)	和歌から派生した季語の本意(その十)
旅の気分	清澤 範子 (19)	物理学者と詩歌の世界(16)	物理学者と詩歌の世界(16)
はじめて知りぬ	北川 宏廸 (20)	鎌田敬止という人(五十三)	鎌田敬止という人(五十三)
卒業証書	安藤 和代 (21)	絹の話(5)	絹の話(5)
Vサイン	弓谷 久子 (22)	「氷魚」のことから(124)	「氷魚」のことから(124)
教へ子	杉浦恵美子 (23)	ことのはスケッチ(389)	ことのはスケッチ(389)
語彙	平松 裕子 (24)	和菓子街道(55)	和菓子街道(55)
春の光の	小野可南子 (25)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定
			平松 温子 (44)
			今泉 由利 (42)
			岡本八千代 (41)
			今泉 雅勝 (40)
			鮫島 満 (38)
			一石 (36)
			喜仙 (35)
			佐藤 喜仙 (34)
			弓谷 久子 (33)
			山口千恵子 (33)
			堀川 勝子 (33)
			平松 裕子 (32)
			半田うめ子 (32)
			伊藤八重子 (32)
			皓一 (31)
			喜仙 (31)
			一石 (30)
			植村 公女 (30)
			白井 信昭 (29)
			いしはとぶ (29)
			伊藤 忠男 (28)
			秋山 逸穂 (28)
			夏目 勝弘 (27)
			山口千恵子 (26)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

おのおのこと語りあひ父の忌にはらから六人父をいふなし

P
165

わが植ゑし杉らしげりて朝どりの朝たちてゆく羽音をぞきく

P
166

歌集 一本の木

杉 浦 弘

昼すぎてしばらく経ちし日の高さ桜散りしける坂を降り来る

いつしんに読みふける子とならび寝て源氏物語を読む二三枚

しなければならぬ仕事なのかおぼろげな月の裏面の写真が載りぬ

花房

蒲郡 岡本八千代

わが岬の海原はつづき遙かなる東北の海に地震なみマグニチュード9

なんとなくなつたゝなんとなく哀しみの心になりつつ一日暮れつつ

何となしそこそこではなき思いしつつ夕餉の仕度にかからむとする

働きて独り住まひの千葉の孫に愛知コシヒカリ送りてやらな

一家なす東京の子らにも送りやらむ値の安き愛知コシヒカリを

夕庭に馬酔木の花房の白あかり東北地方に余震ありつつ

今日の風今日の寒さにゆるるあせび白きあせびは白房ゆるる

紅べにあしび白きあしびも花房となりてそれぞれゆれてをりけり

雨ふらば傘さしてゆく豆腐買ひに光る水たまり二つまたぎて

春さむく暮れゆくけふも老いの身のありてこれよりもの書かむとす

残すべき物

新城 白井久吉

うぶすなの香の祭りに厄おとす若き男の子は三人のみと

亡き兄の起居せし部屋の扁額は在りし日のまま「遊於藝」と

物置と猫やねずみの遊び場の古家の解体工事の契約す

残し置く物と捨て去る物を見る暇もなく工事始まる

午後の五時人夫の帰りたる後で残すべき物を集めてまわる

座机や書棚、本箱、鞆、など使へる物はいくらでもある

若かりしころ集めたる図書類の多くはごみとなりて消えたり

今の家を建築の時残りし厚板も角材もみな捨てられぬ

賀茂神社社掌・白井傳造 の毛筆記録の木箱一個入り発見

ことばにはならぬことばで我を呼ぶ曾孫はすぐに二歳を迎ふ

地球なる

東京 今 泉 由 利

目に見えず感じることもなきままに蓄積さると放射線量

地球なる定めと起こる大地震地球内部構造図ひもとく

滅亡のインカの暦に残りをり二〇一二年地球は滅ぶと

地球なる土砂岩石にふくまるる放射線を受けつつ日常

地球なる深部にプレート沈みゆく証しと揺るる巨大地震

離れるか衝突するか擦れ違うか無防備にをりプレートの上

中心は7000度にもなるといふ地球の上に住み続けろつ

おほいなる天の川銀河の片隅に地球は存在私の居る

韻を踏む激しきリズムに身をまかせ心もまかせNE-YOチャリテイ

放射線治療といふは頼りにし放射線量怖かりをりぬ

金魚飯

豊川 伊藤八重子

沈丁花の蕾に托す妹の手紙絵届く早春の朝

草も木も萌えたつ庭に立ち出でて眺むるばかりの老いとなりたり

衣食住全て失くせし被災人吾が身と置き替へる寒戾り来て

失業し一年経たる孫^{はじめ}甫契約社員になったと告げ来

望みぬし就職決まる孫^{わさ}長をよろこび合える春となりたり

湯室に肘掛椅子の入れられて気遣ひされつつわれら^{ながら}存ふ

時かけて俄庭師が剪定のわが庭の松緑生きづく

咲き揃ふ黄水仙と紅椿瓶に挿したり友を迎へむ

枝垂れ咲く小米のやうなる雪柳一枝手折りて元屋敷出る

買ひおきの冷蔵庫のものと人参を金魚飯に炊くけふの夕飯

今年も

伊丹 青木玉枝

春を待つ心は浮きうきするけれど花粉症のマスクいまだ取れずに
せめぎあう冬と春との風音にひと日暮れたり粉雪の舞ふ

手ゆびにも老化はきてゐるああまたとつかみそこねて皿割れる音
足の運びよくなりたりと介護士の言葉うれしや励みとなりて

送迎バス一人ひとりを降しゆく背後の街の灯り遠のく

各国より支援の輪が広がりて立ち上りませう若きも老いも

試歩の足少し伸ばして梅の丘に元気を貰う生きて今年も

桜より梅が好きだと言ひし友凜と生きゐる生涯独身

春が来て桜の便りもきかれるに別れし親友より消息はなし

限りなくいい親友だつたあなたの事桜大樹に話しています

日本合戦譜

豊橋 佐々木利幸

冷え冷えとする今日の寒さを耐えて居り欧陽詢の法帖を臨書しながら
粉雪が舞ひ舞ふ今日は躊躇ひぬ我が日課と決めたる散歩を

久々に門球の競技に参加する我は五千歩を歩かむと思ひて

我よりも十歳も老いたるがゆたゆたと今日も楽しみ居り門球の競技に
寒々と立つ青鷺の一群れを撮りぬ神田の堤に来て

元旦より百日を我はひたすらに臨書をしたり欧陽詢の法帖を

底冷えがする今朝は来たり中古カメラの二つ携えて野田の城跡

脹脛が疼痛する我は渋川に来て紅梅の花を幾百コマも撮りたり

寒き今朝は八畳一間に籠りつつひたに読んだり日本合戦譜

膝が痛む我は次郎柿の栽培を捨てむと今日も思ひしことも

寒き弥生は

岡崎 林 伊 佐 子

山畑に菜の花草花むれ咲きてこもごも匂ふ寒き弥生は

萌えそめし若芽の色も異なりて山の木群に春の訪れ

早春の雑木林に低く飛ぶ鶺鴒もしたしき吾を離れず

壮^{わか}さにはまだ自信あり農仕事に山の仕事に多忙なわれは

間伐に伐り捨てられし太き杉なでつつ愛しむ育てしわれは

茎立ちて花咲く蔬菜の料理など工夫凝らして老いを楽しむ

無住なる隣家の庭に萌え出でし土筆のあはれ遅霜にあふ

杉森に鹿が荒らした椎茸の椀木に夫とネットを覆ふ

いち早く山に萌えたる黒文字の木の芽は青くほのかに匂ふ

縁側に温まりながら昼餉する山の空気に弁当うまき

ほっほっ温き

豊川 内藤 志げ

七月に宝永山の火口へと真白全けき今日の富士山

中腹に雲一つ浮く富士山を愛でゐて友と車に眠る

身を縮め屋外の足湯に浸りたりほっほっ温きが体をのぼる

揺れてます揺れてゐますとラジオより葱を束ねる一人の作業場

家を車を一気に圧して畑を呑む東北の津波をテレビの映像

梅園の花もよけれどわが畑の二本の梅真白五分咲き

腰ベルトキリリと締めて久しぶり地下足袋を履き足踏をする

垂れ竹を暖簾のごとくくぐり抜け葱を採りにと近径をゆく

散歩道太き土筆を選びつつ両の手一杯握りて帰る

蹠りつつ草取りをれば満たさるる背中に温くし春のお彼岸

恐ろしき

豊橋 伊与田広子

夕食を止めてテレビに見入るベートーベンヴァイオリン協奏曲

数字は語呂にて覚ゆわれも又電話番号語呂に当てはむ

優勝者数字と文章異なる人夫々得意あるらしきなり

記憶力練習すれば強くなる優勝者初めは自信なかりしと

われは先ず友の家などよくかくる電話番号語呂に当てはむ

真黒になりし津波は次々と家押し倒し流れ行くなり

家々を薙ぎ倒しつつ進み行く津波の恐ろしさ初めて見たり

人事ひとごとと思へずわれはテレビ見る東海地震心配となりぬ

津波には連絡出来ず地震には被害はなきと会社は云う

津波の地に桜咲き初む映像に桜の季節となりたるを知る

恐怖

島根 金津 文枝

豪雪に苦しみの思ひ出より東日本地震大津波惨状に驚き恐怖

余震強く大津波の酷さ見るだけで涙流れ壊滅状態

調布市に住む長男は無事停電なく電話も通じ元気と知らせる

長男の無事一晚寝むれぬ心配に心も軽くほつとする

大津波で瓦礫の中を父母が己が息子の名を呼ぶ姿

大津波流され壊れし家跡に写真を拾い手で拭く父母か

薄黒き白鷺の産毛わが庭に風に吹かれてふわふわ落ち来る

鴉等も白鷺の子を狙ふらしがあがあと騒ぎ立てゐる

宮森の大木に止る白鷺を雄牝二十羽偶数である

物音のひとつ無きごと絵手紙教室紙めくる音筆洗う音

弥生一日

名古屋 近藤 映子

窓の外春めく光と見えれども外気は冷たく頬に当る

弥生一日しとしと春雨ならぬ氷雨は左手に落ちぬ

わが夫に明日はおひな節句と話し掛け左手握手わずかな力

弥生とてまだまだ寒いひな祭小さな手作り雛をそつと出し置く

弥生月中葉近づく曇り日の何故か重苦しき昼間

東北のマグニチュード9・0の地震この八階をゆさゆさ揺する

曇り日の灰色空の重苦し地震情報続々と続けり

我夫に東北関東に大震災が起きたと話せば吾をじつと見つめる

お彼岸に息子夫婦と墓参り変りなき西明寺本堂のお経を

この弥生寒さも寒し震災のTVニュースも夫と見聞きす

水ぬるむ日

豊橋 胃 甲 節 子

神田川堤を行けば幾つもの土竜塚あり土柔らかく

昨日の晴れ今日雨降ると思はねど朝には予報の小糠雨降る

青鷺は何思ふらむ冬枯れの中州の一羽只佇ちつづく

漸くに水ぬるむ日々神田川に甲羅干す亀の姿見へ初む

頼りなき身を怖れゐて染めもせず白き白髪梳きつつ哀し

初花でさへも敢無く散り落ちぬ美しき椿は美しき儘

諦らめた決意の筈も喀血と言ふ現実には脆く乱るる

大震災大津波の余りの凄じさテレビに胸痛めつつ此の身も病みぬ

大津波これが映画なら如何ばかり救はるかと冥福祈りぬ

福島原発大震災に彼く脆く壊たると誰が思ひ描きし

心づかひの

新城 半田うめ子

久々に金谷公園友と来て焼鳥肉を食みてゐるなり

深々と頭を下げつつわが庭の雪の下の葉を摘みて行きたり

小鳥らの鳴きてゐるなり貰ひ来し森藤柿の柿を求めて

誕生日お目出度う離れ住む孫に貰ひし美しき洋服

孫香奈は昼食作り吾の為心づかひのやさしかりけり

はらはらと舞ひ落ちるなり庭先の美しかりけり山茶花の花

カーテンを閉ざして昼寝トントンと戸をたたく人知らぬ人

愛らしく大きかりけりうさぎさんやさしき孫は撫でてゐるなり

旅の気分

春日井 清澤 範子

武者隠し付くる部室に十日間喘息の発作に苦しみてをり

静寂の中にありたり境内は八王子神社凜として立つ

夫と吾娘と三人の暮しにて皆膝腰に痛み持ちをり

家に居て旅の気分を持ちたくて旅の浴剤の風呂を楽しむ

年賀状の三等当り手続きに揃ひてゆけり夫と娘と

日曜日とて朝寝するなり味噌汁は皆起きるまでストーブの上

薬剤の湯にのびのびと手を伸しさする肌よりすべすべの顔

コーヒー店にて娘と向ふ一刻ときに昔の縁えにしを語りてをりぬ

父亡くし母の慈愛に感謝する今居まされば九十二歳

庭にある椿の蕾に春の風丸くふつくら膨らみて来る

はじめて知りぬ

東京 北川 宏 廼

映像の津波の中に町いくつ声ひとつなく吞まれてゆけり

絶対を想定外が覆へす人間の科学に絶対はない

原発は知らぬが仏念仏をはじめて知りぬミリシーベルト

列島に居住する限り逆らへぬ国土の自然と自然の摂理

効率と集積・利便性追求の社会システム変へねばならぬ

五十歳にて九死に一生得し身として大震災を起死回生とせむ

朝寝坊は罪深きこと寒き地に救助を待ちたる人を思へば

息子より乾電池六個届きたり気が利くわねと妻が喜ぶ

んーうっと両腕を上げ胸反らし背筋伸ばしていざ生きめやも

震災に会はずりし街を見回して今日しめくくる会議に向かふ

卒業証書

豊川 安藤 和代

雪見つつ雪の便りを友へ書く桜草の切手ぴつたりと貼り

雪が降るこの降る雪に混ろひて子のある庭に嫁よ降り来よ

寒いとて家事をおこたる吾の目にチュウリップの芽の紅まぶし

汁温めまたぬくめては夜の十時塾から帰る孫を待ちゐつ

洒落気がちよつぴりでたか鏡の前に高三の孫時長く立つ

寝転べば窓から見ゆる空の色昨日と違ふ雲流れゆく

母の死に涙も見せぬに孫はけふ鶏殺処分の記事に泣きをり

その母の遺影は吾が膝にあり孫は今授く卒業証書

入試には確かな手応えあったのか帰宅す孫の口笛聞こゆ

日輪の色柔らかく射す庭にひなの口程柳芽吹けり

Vサイン

豊川 弓 谷 久 子

少しだけ寒さ緩みし二月の尽父の逝きし日子の誕生日

父の笑顔思ひ浮かばず生真面目に一世を過ぎし父逝きし日よ

桃の節句と便り届きぬ十五年みさと共にありしひな飾り

一面のがれきの町の映りゐるあの空爆の日もさながらに

一面に細き土筆の伸び立つる摘む人も無き御津川の土手

電気毛布の目盛り上げたり今少しぬくもりゐたし春浅き朝

Vサインみさとの笑顔の写メ届くサクラ咲きたり我の心に

紅梅の庭に色濃き花あかりながらえゐればよきこともあり

御津山の色少しづつ春の色漸く来るらし遅れゐる春

去年より九日遅れて漸くに染井吉野の咲き初めしとか

教へ子

蒲郡 杉浦恵美子

美容師は二十年前教へし子我の最後の晴れの髪結ふ

先生のウチらは最後の教へ子か組の子気付きて嬉しげに笑む

全員が三年一組大好きと口々に言ひホームルーム閉づ

折角の袴姿を我が夫にひと目見せたし着替へず帰る

やれやれを百遍ほども繰り返しさうしてけりをつけむと思ふ

窓の外長閑に流るる春の雪我の最後の入試監督

春の雲西から東へ流れ行く遠き山並雪は残れど

要録も書き上げ後は仕事なくひたすらぼうつと頬杖突いてる

この一年息つく暇なく駆け続けゴールしたればこういうことか

要る物と要らぬ物とに分けたれど要る物少なし教師廃業

語彙

豊川 平松 裕子

剪定もなされず高く高く伸ぶ背戸の白梅今がま盛り

地震あり幾許の時過ぎたるに吊り花入れの揺れ止まずをり

パソコンの中の小さき画像にも幼は地震地震と指さす

舌足らずの幼の乏しき語彙の中に地震という言葉加はる

靴脱ぎて砂に遊べる幼らはしばし争ふこと忘れゐる

縫ひぐるみの親はゐぬかと問ふ母に合はせて答ふただただ悲し

命あるものと思ひて縫ひぐるみあしらふ母の小さくなりて

一段と小さくなりし母をかかへベッドに身体の向きを直しぬ

主人公の納得してゐることがらを納得できぬ小説読み終ふ

我が峡の常の景色もこの朝は春の霞に包まれてをり

春の光の

豊川 小野可南子

孫達の知識の中に加はらむ夕べの空の青暗みこし

庭土を掘りて遊べるこの児等に春の光のはればれと差す

我庭のこここの隅にこの年も慎しみぶかく萌え出づるもの

春寒き我が庭隅に萌え兆すちぢれ緑は日本桜草

庭土の小さき草を抜きてをり背中合せに語らひながら

水鉢にそよげるがごと黒目高四尾と見しは二尾とその影

草とりの私の眩暈は東北の大地震のその時と知る

映像は黒き津波が日本を襲ひて壊して暴虐のさまを

整然と区画されている田や畑を舐め襲ひ狂ふ黒き津波よ

希望といふひかりあつむるふつくらと白木蓮のこの真白花

可能性

豊川 山口千恵子

過ぐる刻に逆らふごとく遅れゐる居間に見上ぐるこの掛時計
可能性無限に持ちゐるごとくなり先ゆく桃子のつやつや黒髪
無造作に束ねし髪形似合ひつつこの春この子は十九になりぬ
階段をいたはられつつも心地よし背丈伸び来し孫につきゆく
両の手をさすりて舞台に送り出すこれより弾くはショパンのワルツ
一つ音間違へたりと涙するひな子のワルツはわれには万全
じゃがいもの青紫の芽出づる種薯埋めしその間隔に
無花果の二本の枝を一文字に無理矢理伸ばし支柱に結える
日常は一瞬のうちにっひえたり容赦なき現実をテレビはうつす
柔らかに知多の若布はもどりゆくここには静かな日常のあり

冬ゆかんとす

豊川 夏目勝弘

白梅の色あせ初めし違はずに三寒四温の寒の二日目

アンテナの屋根に倒るる一軒家いましタヌキが庭に入りゆく

枯草の堤にツクツクつくしの穂先つよき西風に真向ひ行きぬ

庭松のコモを外しぬ虫ともども燃ゆる焰ほむらにしばし暖とる

日だまりの庭木に群るるかじけ鳥われに間髪いれず飛び立つ

野に山に食べ物少なき二月尽キャベツの穴はヒヨドリどもぞ

我が座る窓辺の庭木にジョウビタキ飛び来ることのなくなりにつけり

柿の木のすがしく手入れされし畑ツグミの動き忙はしくなりぬ

冬大根抜きし跡の残る畑ムクドリげんこうぼうらいの群れしきりに漁る

冬ゆかば元寇防墨げんこうぼうらいみにゆかむ寒さに弱きわけではないが

無精髭

「招待」 秋 山 逸 穂

にびいろのたいらな雲のひろがりは空気を重たく圧迫している
真夜中に行き場失い放浪すホームレスになったような気がする
ぬかるみの小道のわきに一輪の梅のほころび今朝は見つけぬ
無精髭指先にあらくきわだちぬ休日なればそれもまたよし
土におう川原の土手おおいたる枯れ草のしたに新芽はみえず

天災か人災か

大阪 伊 藤 忠 男

平穏になりたる海を眺めいる老婆の目差しただうつろなり
天災か人災なのか問う前に起きしことすら信じ難きや
原子の目地球を救うエネルギーと今は牙むき地獄と知れる
貴重なる熱が命の発電所冷やす苦労を誰ぞ想うや
いつもある明り無き夜のロウソクに懐かしきごと心覚える

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

東風強く吹きくる庭に咲きそめり今年も梅の花しろじろと
松の葉のざわざわの音鳴りはじむまた西風の起こり来るらし
まだ寒き川風吹きくる寒狭川にあまご釣りにゆく夫に従ふ
蠟梅の黄水晶色に咲く夕べまた思ひをりひとつ秘めごと(入選・岐阜文芸祭)
はだか木の銀杏の梢ゆれやまず西風つよし寒のもどりか
くじ浜を一人歩めば春風がショートの我的髪に吹きくる
窓に打つ風はいつしか止みてをり君の寿ぎのこの朝にして

吉見幸子
牧原正枝
岩瀬信子
三田美奈子

稲吉友江
鈴木美耶子

中天に

豊川 白井信昭

掘り起こす土のなかより現はるる小さき蟹のごそごそ動き

中天に鋭き三ヶ月残りつつ犬との散策今日のはじまり

茜橋渡りてゆけり埋立地夕焼け色の海の広がり

「俳句」

啓蟄や乾いていたる鉢の上

植村公女

雉鳩のモンローウオーク春寒し

春光や赤子の帽子少しずれ

春光を浴びて山々薄笑い

一石

生と死や安否知りたし氷雨降る

怖ろしや牙を秘めたる春の海

雪解ゆきげ水足元に満つ尾瀬ヶ原

喜仙

槌音つちおとの春雨の中聞えくる

舟出して波の間に間に春惜しむ

水温む小枝流れて野川かな

皓一

ぎっしりと花ビラ込める蕾かな

丸顔に細目たれをり古雛かな

私の一首

濃紫艶やかに咲く朝顔に現のわれの何にさびしや

伊藤八重子

人は生きている限り何かしらの愁いをもつてくらしているのではないのでしょうか。たった一日の命を艶やかに咲き切つて落花してゆく朝顔の見事さ。思うままに自己主張もできず、日を小さくすごす自身の在り方と対照的に見えてさびしく思つたことでした。

追体験社会教育に加はりし西行と芭蕉のさやの中山

半田うめ子

若き日に友と語り、静岡は思い出の多い所です。老いてより、文学散歩、火曜日には田中洋二先生の教育を受け、西行も芭蕉も、詳しく。教室の中の先生の教育の熱心さ、心に残り、懐かしい、さやの中山です。

たかが干し柿されど干し柿こんなにも芸術的に作る君かも

平松裕子

近年毎年頂く干し柿。彼女の干し柿は味はもとより見た目も非常に美しい。最も彼女は歌の中で「吊し柿」と言われていますが、そこは悪しからず。前年に頂いたとき、その透けるような色のグラデーションに見とれてしまいました。売っているものでもこれ程美しいものにはお目にかかれません。口語口調で詠んでいて、後に「かも」は変かもしれませんが、私としては結構しっくりしていると思いました。

住む人の好みに家は変はりつつブーゲンビレアの生け垣見えず

堀川 勝子

二十五年振りにインドネシアのジャカルタへ旅をして、かつて二年間を暮らした「我が家」を訪ねた時の歌です。その家は、すでに人手に渡り玄関の前にあつた自慢のジャックフルーツの大樹も消え失せ、ただ家の外観のみ昔の名残を止めて建っていました。私達はそれぞれの思いを込めて、その場所にしばらく立ち尽くしていました。私のジャカルタよりがとうそして さようなら と

黄葉する銀杏二木鮮やかにこの家もつひに無人となれり

山口 千恵子

広い庭にある二本の銀杏は、美しく黄葉しはじめた。独り暮らしであつたこの家の人も、施設にはいられて、空家になつてしまった。

私の住むせまい町内にも、老人家庭が増え、このような家が他にも見うけられる。

家の前の道の、落葉掃除などをしてみえた姿を思いうかべ、何となく淋しい思いを抱きつつ、木々の中に目立つ黄葉を眺めて通り過ぎた。

亡き母の今日は生れし日母の齢何時しか越えて我は生き継ぐ

弓 谷 久子

「母逝きて思い出のみの残りたる故郷は遠くなりけり」三十余年前三河アラragiに入れて頂いた時、始めての歌会に出した一首です。

母を亡くして間も無かつた頃の私にとって下手でも忘れられないなつかしい歌です。貧しい農婦であつた母も晩年は子に孫に友にかこまれ短歌を詠み、病まず春の彼岸にぼつくりと逝きました。ながらえて母の齢を越えた今母のような終焉を迎えたいとそれが私の念願です。

贈呈誌 三月号

佐藤邦広

「愛媛アララギ」

近藤和子

百歳まで生きると言へばハイどうぞ妻の返事の面白からず
「群山」
雨内道子

一雨に冬の野菜の生き生きと青さ増し来る葱も水菜も

井上弘

凍りたるボトルの水は卓上に朝の光を素直に通す

梅津摩利子

冬空に瀬戸の潮騒ひびきをり枇杷の花咲く道歩みゆく

「鹿児島アララギ」

山本和男

走りつつ白き月見えミラーには茜の夕日写りてをりぬ
「檜の木」
鈴木秀子

いのししの踏み荒したる土黒し冬日しらけて射す畑の土

月精薫

瑞々しき白菜の東店先に積まれてあれば手に抱きみる

望月百合子

太隅の夕焼空のあざやかにしみじみと見る葱植ゑ終へて

「高知アララギ」

結城多良子

洗ひたる障子の棧を拭くさ庭垣の山茶花いま咲き盛る
「柊」
上坂和枝

木蓮のおさなき蕾ぬらし過ぐ時雨のかなたの古里は雪

「滋賀アララギ」

星居洋子

くぐりゆく暗く湿りし洞窟の水わくところ羊歯青あおし
内上照子

雪の下野菜を取りて夕餉にと靴跡つけつつ畑に出でゆく

津島佐和

雪注ぐ蹢り口の戸湿り帯び茶室に這へば障子明るし

大谷登美子

雲切れて間近にせまる山々の切り立つ山肌雪に輝く

「冬雷」

荒木米子

一月のニュージールランドよマロニエの緑輝き初夏の風吹く
神谷叔子

七十まで生きて分かること多々ありて分らないこと益々増え行く

軟らかに芽生えし蓬の根は白く太く絡みて土中に深し

和歌から派生した季語の本意（その十）

「笹」 佐藤 喜 仙

27 夕立（ゆだち・白雨・夕立つ）

「暮立の雨落ることに春日野の尾花が上の白露念ほゆ」

詠人知らず（万葉集）

「夕立のまだ晴れやらぬ雲間より同じ空とて見えぬ月かな」

俊恵法師（千載集）

夕立とは雨または雨を起こす雲の意で使われている。万葉時代には暮立で夕立を表記しているので明らかに夕方に降る雨ととれる。又、夕立つと動詞としても使っているが、夏空一天にわかにかき曇って風が起り雨も一時的に激しく降る様を言っている。

例句

夕立に独活の葉広き匂かな

基角

夕立や砂に突き立つ青松葉

子規

英彦山の夕立棒の如きなり

朱鳥

28 雷（雷鳴・雷雨・はたがみ・落雷）

「皇は神にしませば天雲の雷の上に廬せるかも」

柿本人麻呂（万葉集）

「逢ふことは雲居はるかに鳴神の音に聞きつつ恋ひわたるかな」

紀貫之（古今集）

夏もつとも多く、雲の中の電気が他の雲または地面との間に放雷す

るときに生ずる。雷電は雷と稲妻である。電気が通った後、空気中に波動が起り、雷鳴を発し多くの場合雨を伴う。夏に多いので夏の季語となっているが、春雷、秋の雷、冬の雷と年間を通して起こる現象であり、それぞれ季語を立てている。

特に冬期は富山湾をはじめ日本海側に多くそこで発生する雷を「蟬起し」あるいは「雪起し」として立項している。

例句

神鳴のならで曇りし梧の花

史邦

昇降機しづかに雷の夜を昇る

三鬼

雷去りぬ雷のにはひの戸をひらく

梯二郎

29 空蟬（蟬の殻・蟬のぬけがら）

「空蟬のからは木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき」

詠人知らず（古今集）

「いまはとて梢にかかる空蟬の殻を見んとは思はざりしを」

平なかきが女（古今集）

蟬は成虫としての地上の生活は一週間位であるが、幼虫は土中に数年から長い種は十数年いて蛹となり、蛹が地上に出て木に上り背より割れてその皮を脱ぐ。その脱殻を空蟬と言い、古来から空しいこと。はかないことのたとえの意を持っていた。

例句

わくら葉にとりついて蟬のもぬけ哉

蕪村

空蟬をひろふ流人の墓ほとり

林火

拾ひ来しうつせみ卓におきしのみ

敦

物理学者と詩歌の世界 (16) — L・D・ランダウ

一石

L・D・ランダウ (Lev Davidovich Landau, 1908 - 1968) 旧ソ連の理論物理学者、アゼルバイジャンのバクーでユダヤ系の家庭に生まれた。14歳でバクー大学入学、19歳でレニングラード大学を卒業、21歳で博士号を取得(1929)。その後、コペンハーゲンでの理論物理学研究所に留学し、ニールス・ボーアの下で研究。帰国後、ウクライナのハリコフに理論物理学の研究グループを指導(1932-1937)(参考資料1)。当時すでに量子力学は誕生しており、理論物理学の黄金時代でもあった。

物理学におけるランダウの業績は実に多くの専門領域に関わっている。彼の名を冠した理論はランダウ単位、ランダウ反磁性、ランダウ・スペクトル、ランダウ・ギンズブルグ理論と超流動、超伝導、天体物理学、素粒子物理学など実に多岐に渡り、現代物理学における重要な道具であり続けている。1962年、絶対零度近くでの液体ヘリウムの理論的研究によってノーベル物理学賞を受賞(注1)。

ランダウは、理論物理学はそれ自体分離することのできない1つの学問と考えていた。このような《思想》に基づき、物理学の全分野をカバーした難関の「理論ミニマム」を試験に課し、それに合格したものを自らの率いるグループ(ランダウ・スクール)

に受け入れた。そこからは多くの優れた物理学者が輩出した(参考資料2)。ハリコフ時代に、弟子E・リフシツと共著で著した『理論物理学教程』(参考資料3)は、理論物理学の標準的な教科書として知られるようになり、しばしばフィインマンの教科書(参考資料4)と対比される。

ランダウは大粛清のあったスターリン時代の1938年、反スターリン的な言動・活動により、逮捕され投獄された。実験物理学者、P・カピツァ(1978年ノーベル物理学賞)が政府に對して「ソ連最高の物理学者」の放免を懇請し、やっと1年後に釈放された。その後も絶えず秘密警察KGBの監視下におかれた。その当時の事情は、参考資料5に詳しい。

ランダウは絵画をはじめ、映画も含め芸術全般を愛した文化人であった。また詩歌を好み、詩をよく朗誦した。

1962年、ランダウは自動車事故により瀕死の重傷を負った。その後ランダウは再び「科学をする」ことはなかった。

強烈な個性とカリスマ性により、ランダウには多くの逸話や伝説が語り継がれてきた。

そのいくつかを紹介する。

○「あれが研究者のいんちきというやつだ。」

彼のお気に入りの言葉だった。彼はなにかいんちき臭いものを感じ取ったとき、それを使った。

○「この馬鹿者！」

悲劇的な事故の数箇月後、ある精神科医が彼の脳を診断するために普通なら知恵おくれの子供にするような質問をランダウに向かつて始めたとき、彼はこう一喝した。

○「ぼくが冷酷だって!？」

ランダウはグループの学生全員について《エンマ帳》を持っていて、折に触れてそこに感嘆符や疑問符を書き込んだ。3つの疑問符を貰った学生は容赦なく破門させられた。かつてI・M・ハラトニコフ（後の「ランダウ理論物理研究所」の所長）がランダウに、「先生は残酷ですよ」と言ったことがあった。その言葉にランダウは怒り、この言葉を発した。科学上の議論では、ランダウは誰に対しても情容赦がなかった。彼の批判は辛辣だったが、充分に傾聴に値し、かつ正しかった。

○「ランダウの言葉はなく、リフシッツの考えはない。」

ランダウは「執筆恐怖症」として知られており、その著作の大半はランダウの着想・指示を汲み取って同僚が代筆したというリフシッツとの共著の『理論物理学教程』も、同様にしてリフシッツが書いたと言われている。

○「きみは、パウリ（参考資料6）に会ったことがないね。彼こそ、偉大なる知性そのものだよ！」

批判的理性の持ち主であったランダウはまた自己批判の強い人でもあった。ハラトニコフがかつてランダウに、先生の批判的知性をたいへん賞賛しています、と言ったところ、そのとき彼

が答えた言葉。

○「我々は皆エフトウシェンコの前で脱帽しなければならない。」50年代中頃、あるときエフゲニー・エフトウシェンコが「物理問題研究所」にやってきて自作の詩を朗誦した。それを聴いたときに発した言葉。詩人に対するこれほどの賛辞があらうか。

注1・ランダウ理論の超伝導への拡張であるギンズブルグーランダウ理論の共同研究者V・ギンズブルクは2003年ノーベル物理学賞を受賞。

参考資料

- 1) The Free Encyclopedia Wikipedia
- 2) I・M・ハラトニコフ、パリテイ、P 20131、第4巻、第11号（1989）
- 3) 「力学」、「場の古典論」、「量子力学」、「量子電気力学」、「統計物理学」、「流体力学」、「量子統計物理学」など。『統計物理学』、『量子統計物理学』の日本語版は岩波書店、それ以外は東京図書刊。
- 4) 三河アララギ、リチャード・ファインマン、P 36、第57巻、第12号（2010）
- 5) Gorelik "The Top-Secret Life of Lev Landau" Scientific American, August 1997. 『日経サイエンス』11月号（1997）
- 6) 三河アララギ、P 36、第58巻、第3号（2011）

鎌田敬止という人（五十三）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（15）〉

前回の鎌田の手紙の続きである。

前にお約束した時と心境の変化があまり大きすぎるのですが、それが澤田さん個人のお考へだったのか、森谷氏あたりが一枚加つてのことなのかよく判りませんが、とにかく大変なケンマクで白玉書房版を中止せよ、龍星閣の名前で出せ、と言ふやうなことを申されしました。澤田さんはいいお仕事をされる人なので前から並々ならぬ敬意を懷いて来てゐましたので私も困りましたし、それに心境の変化にも十分御同情はもてたのですけれど、と云つて澤田さんの申入れに従ふ訣には行かず、お気の毒いたしました。「智恵子抄」を刊行することが先生に対する私の責務でもあり又社会に公約したことでありますからその旨澤田さんに判つて貰へるやう努力いたしました。そして澤田さんも静かにお考へ下されば判つて貰へた筈です。こんなこと、先生にお聴きに入れたことは大変申し訳なくお恥かしいのですが、先生には全く御関係のないことですから御放念願ひます。今年は雪の解ける頃には是非お伺ひするつもりですが、その折に又

お話し申上げることには致しませう。

（昭和二十三年二月八日付）

鎌田は、前年の十二月に澤田から「爆弾的申入れを受け」たとき澤田の精神状態を疑つたことを告白したうえで、やはり確実な根拠となるものを持つて居るだけに、「今更ら澤田さんから苦情が出るやうな行きがかりにはなつて居りません」と自信に満ちた言い方をしている。光太郎は七生子に「澤田さんとの事には小生関係しない事にいたします」と書いたとおり、昭和二十三年に『智恵子抄』を龍星閣に返してはどうかという手紙を書くまでは一切関係していない。『智恵子抄』が龍星閣から再び刊行される経緯については後述したい。

澤田が鎌田に与えた承諾についての疑念のなくなった光太郎は、『智恵子抄』を最初の出版物として白玉書房を出発させた鎌田に、次の書簡を送っている。

本の売行によつて貴下に迷惑をかけはせぬかとその事を案じます。「智恵子抄」その後よみ返してゐますが、誤植は今までに見つかりません。これは書物としては珍らしいと思ひます。龍星閣版には最初かなり誤植があつてだんだんに訂正しました。からだは十分に御注意下さい。白玉書房を創立した以上、出版者としてのお仕事を心ゆくまでなされなければなりません。今後の日本にとつて出版者の

意義は重大です。又それだけ面白い仕事と思ひます。やり甲斐のある仕事です。急がずに確実に貴下流に白玉書房がよい発展をしてゆく事をいのります。欧米などにも大企業としての出版会社のある中に介在して小企業の出版者で大企業者の成し遂げ得られぬよい出版をしてゐるもののある事を見ると、白玉書房あたりの仕事の目標がはつきり感ぜられます。乱暴野蛮な日本従来の出版界が正当な軌道にのるやうなる日を翹望します。

(昭和二十三年二月十日付)

ここで光太郎は『智恵子抄』の出来ばえを讃えるとともに白玉書房の前途を祝福している。白玉書房の出版界における役割を細かに述べたこの書簡は、すでに戦前に八雲書林を経営した経験をもつとはいへ鎌田に大きな勇気を与えたにちがいない。鎌田は生涯ことある毎に光太郎のこの言葉を思い出したのではないだろうか。光太郎はその十日後の手紙にも、「白玉書房発足の意義がだんだんはつきりして愉快におもひました」と鎌田を祝福している。鎌田はこれらの励ましに対して、

「急がずに確実に！」とおつしやつて戴き非常に勇気づけられました。そして小出版者の意義をお示しただき大変感動いたしました。大中小どの出版者も戦後ただハタタリに物を言はせようとしてゐる有様ですが、彼等を軽蔑できるだけの仕事を必ずやり遂げたいと思ひます。(中略)先生の御言葉は(略)私にとつて力です。信仰です。

絶対です。私を甘えさせないで正しく真直にお導き下さいまし。

(昭和二十三年二月十六日付)

と素直に応じている。

白玉書房版『智恵子抄』が出た直後から鎌田はその再版の希望をそれとなく匂わせていたが、その四ヶ月後に鎌田は正式にその予定を光太郎に伝えているらしい。それに対し、光太郎は、

おてがミによると健康の御都合もよろしく、出版の方も着々諸家のものにかかつて居られるやうで何より心強く存じます。(略)『智恵子抄』再版の由、大丈夫かしらと一寸懸念しますが、一切おまかせ申上げます。訂正箇所は発見しません。いつか後日に機会があつたら智恵子の病状記録のやうなものを加へたい気がありますが、これは今中々書けないでせう。これはむしろ精神病研究者の参考として書くつもりなのです。

(昭和二十三年四月十一日付)

と返事している。龍星閣版から白玉書房版に移すときにも光太郎は二篇の詩を加えたのだったが、いままた加えたいものがあることを表明しているのであるから、『智恵子抄』に対する気持ちの入れようがわかる。

絹の話 (5) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

遙かなるシルクロード

絹織物が中国で作られるようになって5000年にもなりますが、その製法は長い間秘密にされて来たと云われています。絹はナイロンが出来る迄、莫大な富みをもたらす戦略物資的な性格を持った物でした。

特に中国から西の中央アジアからローマにかけての興亡激しくも、豊かな国々へ贈り物として、交易品として、計り知れない政略と利益をもたらしていたと思われる。シルクロードに皆等が出来、整備されて来ると、唐の長安の都は絹がもたらす利益で華やぐことになります。後世日本でも昭和10年代前半の輸出総額の40%以上が絹であり、太平洋戦争に至る戦費調達に大いに役立ったようです。戦艦大和は絹で出来た、と云う人がいます。

シルクロードは三蔵法師の旅のように非常に苦難と危険な道程でした。ラクダの隊商もオアシスで中継ぎしながら荷物を送るのですが、途中これを略奪する賊があとをたたず、また隊商そのものが荷物と一緒に砂漠に消えてしまったりで、よほど利潤の高い交易でなければ割りに合わなかったでしょう。

それではクレオパトラのうす衣はシルクか?と云うことですが、定

かではありません。一説にはマダガスカルやエジプト以南で採取されるゴノメタ蚕(野蚕)から作られた絹織物ではないかと云う学者もいますが、今日この地域でうす絹を織る技術的痕跡も無い事を考えれば、やはりフェニキアの商人が遙かシルクロードを経由して入手した物と思いたい。当時既に中国ではうす絹はおろか、錦織も出来ていた様です。

絹は権力者が美しく着飾る為ばかりではなく、桜蘭の遺跡から出土するミーラの様に、遺体を絹で被うと、絹が腐敗を防ぎ奇麗なミーラを作る為にも利用されていたようです。

西方の国々は絹が何から作られるのか長い間知らなかった様です。その秘密を知ろうと各国の王はあの手この手で情報収集をしたようです。遂にカシユガルの王が中国の王の娘を嫁にもらう時、髪の中に繭を入れさせた、話は有名です。今日でもウズベキスタンが良い絹の産地で日本にも輸入されています。

4世紀には現在のトルコ、6世紀にはフランスに伝わってゆきます。

それでは絹の東進、日本へはいつ頃伝わったのでしょうか。縄文末期の土器等に絹らしき物の付着があるようで、長江周辺から直接北九州に米より少し早く伝来したようです。

蚕が繭を作り、蛹が繭から出て、産卵するのに10日位、温度も湿度も似ている日本へは伝わり易かったけれども、道程が長く、乾燥地帯を短時間に運ぶ手段が無かった、と言った方が良いかも知れません。

「氷魚」のことから(124) 岡本八千代

立春がすぎてもまだ雪が降ったり、冷たい風が吹いたりしていた――三月十一日、午後2時46分、三陸沖をマグニチュード9の大地震・大津波が襲った。――。

果てしない惨状の中、十二日午後3時36分頃、福島県にある原子炉の水素爆発が発生してしまった。

誰も予期しない突然の自然の力の破壊力に人間はどうすることもできない不思議。しかしその人間が存在していなければ、この宇宙の大自然を甦らせることのできないだろう不思議。この自然と人間の相対的な考えの不可思議を今こそ思う。

この東日本の巨大地震に、多くの人命を失い、原発事故の放射性物質の漏えいの不安で、小さい島国の日本列島が無くなってしまおうのかとさえ怯えてしまった。

こんな時、私は思い出した。物理学者、とくに地震の研究科学者としての寺田寅彦の言ったことば「天災は忘れたころ来る」という名言を。――生死の別れはあまりに悲しいことではあるけれど、生の運命に恵まれたかぎり、今の天災を忘れないように心して、人生に向かいたいと更と思う。

家族を失い、家も無く、人々は避難生活に苦労をされている現状なのに、私はペンをもって前回のつづきを書くこととする、感謝とすまない気持。

第十一回 鶯も谷の戸出るやけさの春

花ぬす人

・紀尾井たちの正月、芸妓たちの正月

小松を送って行った紀尾井は、ついに芸者屋で一泊。そこで元旦を迎えた。芸妓屋の朝はにぎやかに楽しそうに挨拶をする。そして、兼吉という人と小松と雛鶴たちは、部屋の正月の掛軸のことで(作者は永濯という画書き)しばらく会話がづく。兼吉は都々一をうたう。

「同じかねでも夜明のかねとかりたかねとはいやなものよ」皆「ハハハ……」笑う。

第十二回 火事に胸もやし初めたるのは哉

非風道人稿

・山西の令嬢は父母の元にいつしよに居ることを心よく思っていないかった。

・しかし、父親は司法省の宿命で二年間仙台へ滞在することになった。
・山西令嬢は東京に残って本郷の或る下宿屋にその身を置くことになった。

・二三日後紀尾井近くで火事があったこと。また、他の女の人と両国の方へ行った紀尾井を見たこと。

・山西は紀尾井を探しにひとりで両国あたりへ来てみれば、深和に会った。

・深和から、紀尾井はもしかすると死んだかもしれないと聞かされる。
・その紀尾井は、柳橋芸者、小松の元にいたのであった。

今回はあらずじをここまで。(つづく)

いとはスケッチ (389) 今泉由利

『NE-YO』

五分毎のポーズを追っていた。揺れているけれどモデルさんがポーズを乱さないから描きつづけていた。

その最中、「今、揺れているでしょう!!大丈夫なの!!」。ニューヨークからの電話で、やっと大地震だと察した。

「全線電車は止まった」と、ニュースは伝ってきた。電車に乗って出掛けてきた全員が路頭に迷うことになる。タクシードも、宿ることも、もう無理。電話も通じなくなった。ニューヨークとはずっと話をし続けていられたが。

アトリエを出てしまったら生きてはゆけないことを理解し、次の日になって電車が動きだすまで居座った。

そんなことで苦労はしなかったけれど、玉由が、この四・五年来、毎年の行事にしている「アーチスト『NE-YO』と五十人近いスタッフ」でのコンサート・ツアーの日付けがせまっていた。

外国からのアーチストのキャンセルが続いている。こんなに大騒動になってしまった日本へ：もう無理だろう：あきらめていた時、「なかなか決められなかったけれど、明日、日本へ行くから」と玉由。

アメリカでは、日本への渡航は控えるように：日本に居る外国の人は、大きなスーツケースをもって、成田へ成田へ：日本脱出をしているというとき。

余震は、あきれる程くり返され、地震をあまり知らないアーチスト

一行と玉由が無事、日本の公演をこなせるだろうか。

私など、何の役にもたたないけれど、とにかく全行程を近くに居てあげよう。かくして移動も宿も、音合わせも、コンサート中も：ツアーの一員になってずつと。

名古屋も神戸も大阪も、地震と原発と買い占めと：何気付かなく過ぎ、「NE-YO」が歩くと、女の子達がみつめて寄ってきて、「キャー」「泣きだし」「写真を写し」：こんなに人気があったんだ。

「NE-YO」のツアー中、密着取材がついたから、よけいに目立つのだったけれど、カメラがまわりだすと、歩く姿もオーラを放ち、大スターになってしまったところがとても見事だった。

名古屋の公演も神戸も、「NE-YO」の切れの良いリズムとダンスで無事過ぎ、東京の公演という段になって余震や原発の東京には「行きたいくない」。「キャンセルはできない」。

二万人近い会場は、チケットは売切れになっている。

ガーガー測定器を揃え、放射能に効くという薬も用意し、放射線の医師の指示も受け、東京の水は飲まない、食物も食べない：難しいことを皆クリアし：大阪のホテルから新幹線で、開演直前の新横浜に着き、超満員、ネオンライトがリズムをとり、全員総立ち、「NE-YO」と一緒にリズムになって、「ニッポン・ガンバッテ」「復興を祈り」「チャリティもでき」。

使用電力をおさえたことも苦にならない素晴らしいショーになった。そして、アーチスト一行すぐ新横浜から大阪のホテルへ戻っていったのだった。

何としても無事に帰りたい。無事にアメリカへ帰すことが出来た。

和菓子街道 (55)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

寛政の改革で知られる松平定信は、子の定永が桑名藩主であったため、晩年を桑名で過ごした。質素儉約を唱えた定信の座右の銘は、「人常咬得菜根則百事奄可做(人常ニ菜根ヲ咬ミ得バ即チ百事做ス可シ)」。宋代の学者・汪信民の言葉で、「根菜のような粗食に甘んじることができれば、この世でできないことはない」といった意味で、質素儉約の大切さを教えている。

根菜の代表である蕪を質素儉約の象徴とした定信は、谷文晁に蕪の絵を描かせたほどの蕪好き。定信の命により、盆に蕪の絵を描いて幕府へ献上したのが始まりという「かぶら盆」は、後に桑名名産になった。

お菓子にも蕪のモチーフ。明治40年頃から作られている「かぶ



ら煎餅」は、その名の通り蕪型で、表面には「咬得菜根 百事可做」焼印。節約勤勉の桑名の気風を永く世に伝えていってもらいたい。

蕪型の甘い瓦煎餅。蕪の実や汁が入っているわけではない。

◆かぶら煎餅本舗

住所：三重県桑名市南寺町15

電話：0594-22-1394

お知らせ

▽六月号原稿は、五月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽東日本大震災、…巨大地震、巨天津波、原発の放射線…自然を愛し、自然を歌に詠んできましたが、憎まなければならぬ自然というものを実感しました。自分に降りかかってきたならと想像すると身のすくむ思いがします。被害に合われた多くの方々、また毎月歌誌を贈呈して下さる東北地方の結社の皆様、心からお見舞い申し上げます。人が素朴に生きるということを深く思い返してみる機会がきたのだと思います。

▽宅配社の都合で4月号がお届けできない地方があります。後日お送りさせていただきます。(平松)

▽六月二十六日(第四日曜日)正午より歌会を開催します。昼食をいただきながら、歌評しながら、沢山のことを話し合いたいと思います。

詳細は六月号でお知らせします。

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ケ年分二万円、一ケ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ケ年分二千元、一ケ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができ、

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成十三年四月二十五日印刷 第五十八巻 第五号
平成二十三年五月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

三河アララギ会 今泉由利

URL

印刷所

三河アララギ発行所 〒四四一・〇三二一
豊川市 御津町 御馬 西三七
TEL (〇五三三) 七五・二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九
E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumi.yun.jp/>
株式会社 桜 創 美